

## 府中～江尻～興津 14.6km

## 由比～蒲原 6.9km を歩く

夏休みで中断していた東海道ウォーキングに、久しぶりに出かけた。今回のコースで由比～興津はすでに歩いているので、この間は電車移動に、さらに距離的に蒲原より少し先まで行けそうなので、富士川の手前の富士川駅まで行き蒲原、由比と街道を下ることにした。

一日目は江尻宿(清水)で宿泊し、二日目は府中宿まで歩き駿府城を見学して帰る予定。

## 1 日本橋までの東海道ウォーキングの計画表作成

この先東海道を歩こうとすると距離的に日帰りは難しくなる、今すぐに日本橋まで歩こうということではなく、歩いていたら日本橋に着いたことになればよいと考えている。それにしても行き当たりばったりではだめなので、目的地に着くまでの時間、街道を歩く時間、宿をとる場所などを考慮してそれなりの計画を作成した。

当面は、前回歩いた箱根越え(三島～小田原)に結び付けたいので、鈍行利用の一泊二日を2回と新幹線利用の日帰り1回とする三島までの計画を詰め、残りは一泊二日で日本橋まで5回の計画とした。



散策マップ



乗り込んできた子供たち

## 2 東海道線 4 8 駅 4 時間の旅

いつものように東浦駅 6.33"に乗る、列車が緒川駅に着くと今回は友夫婦の顔が見えヒヤヒヤすることはなかった。大府駅で浜松行きの区間快速に乗

り換える、静岡辺りまで行こうとすると浜松行きに乗るのがベスト。調べてから乗らないと豊橋、浜松、静岡か興津で乗り換えないといけないのだ。いつものように通勤客の多くが刈谷駅で降りたので、シートの背もたれを倒してボックス席に4人で座った。ここから4時間弱はウオーキング前のお喋りタイムとなる。マッサージ師で私の腰の主治医でもある友からは「座っている4時間が腰に良くない、お金をだして新幹線を使わなくては」とけなされている。しかし、鈍行の旅もいいもので、乗り降りする乗客の数で東海道沿線の発展振りが垣間見えるのだ。

いやに降りる人が多いと見れば、駅付近には駐車場や工場が見える。さらに住宅が密集する地区にきたと思えば新たな駅がオープンしているのだ。すでに何回もこの電車に乗っており、車窓を流れる景色も東海道が見えると、あの辺りには何があったとか、あそこで弁当を食べたなど思い出される。旅とは日常を離れることだというのが、今の私たちにはこれが日常のような気がする。それと、いろいろな人たちに出会う。よく覚えていないのだが、確か国木田独歩の「忘れえぬ人々」という作品では、親とか恋人のような忘れることはない人ではなく、旅先などでふと出会っただけなのに何故か忘れられない人のことを書いている。

今回も浜松を出て30分ほどしたとき、黄色の帽子にチェックの半ズボン、半ズボンと同じ柄の小さなリュックを背負った、子供たちが先生に連れられて乗り込んできた。幼稚園児が遠足に行くのかな!! 15~20名程とみたが引率の先生は4人もいた。みんなニコニコして嬉しそうだったのが印象的だった。その子供たちも降りて、また多くの客で混み合ってきた。静岡がちかずにきたのだった、製造業ではなく商業関係の人たちの通勤時間帯になったのだ。このように沿線の街の息吹きを感じながら、おしゃべりをしていると電車は定刻の10.24分富士川駅に到着した。



富士川駅前の案内図



中之郷の街並

### 3 分かりにくい東海道の分岐

富士川駅に降りてすぐ歩道橋を渡ると、富士山が目の前に見える。残念なことにはてっぺんだけ白い雲がかかっている。歩道橋を降りた所に東海道の案内板があった、今いる所は中之郷でこれから向かうのは蒲原宿、ちょっとだけ歩けば東海道に入る。少し歩いた所で道端のお年寄りに「東海道はまだですかね?」と聞くと、ここがそうだという。おかしいことを言うと思いついた。いつものように私は散策マップを、友は街道の地図を持っているのだが、分岐点より江戸寄りの川坂観世音道標が現われたので分岐点を通り過ぎたことが確認できた。来た道を戻り再度たずねて蒲原へ向かう東海道に入ることができた。思い込みがもたらしたミスだった、素直に人様の言うことを聞いておれば、当然ここが東海道ですかと確認すべきだったのに……。要は街道の分岐点には案内板がほしいということだ。



中之郷の道標



東名高速の新坂橋跨道橋の眺め

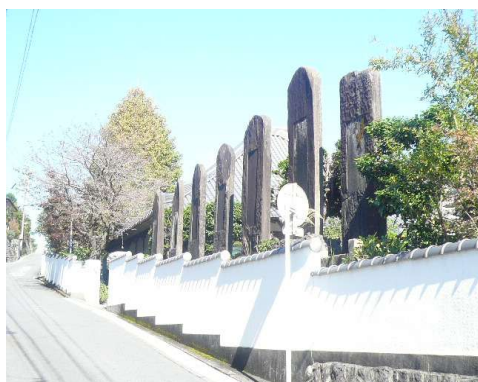
#### 4 実際とは違う「蒲原夜之雪」

街並がまばらになってくると坂道になり東名高速をくぐる、かなり急な坂で振り返ると富士山がきれいに見える。でもてっぺんには白い雲が、その地点に東海道の道標があり蒲原宿へ2.4kmとあった。東名高速をくぐり5.6分も進むと、今度は下り坂になり新幹線のガードをくぐる。左手に秋葉山の常夜灯、右手には民家の庭先に明治天皇が休憩した碑が建っている。のどかな村を過ぎると下に東名高速を見ながら進む並行した道になる、たくさんの車が行きかっている。気持ちのよいお天気で上り坂もあったので汗ばんできた、ドラゴンズのタオルを首に巻き汗を拭きながら歩く。

その東名高速の新坂橋跨道橋を渡るが、ここがすばらしいビューポイントで、東名高速の真上に富士山が見える。でもやはりてっぺんは白い雲に覆われていた。橋を渡ると静岡市に入る、ここは清水区蒲原一丁目ゆりやかな下り坂が続く。坂を下って行くと突然海が見えてくる、7分も歩くと左手に

立派な白壁の土塀が続く寺がある。「海前院光蓮寺」でその門前に安藤広重「蒲原夜之雪」と浄瑠璃姫の案内板があった。「蒲原夜之雪」は広重が描いた雪景色の中でも傑作といわれる、もともとこの蒲原ではこんな大雪は降らない。それに、蒲原のどこにもこんな景色はないという、だからこの作品は広重が画家としての創造力で描いた蒲原だという。

そして、昭和35年浮世絵が記念切手になったのを契機に、記念碑を新蒲原駅近くに建立した。隣には浄瑠璃姫の絵があった、浄瑠璃姫の碑はもっと先の海岸にあるので行かなかったが、姫は源義経と恋におちた三河(岡崎)の長者の娘。義経の後を追って蒲原吹き上げの浜までたどり着き亡くなったという伝説に基づいている。



大きな墓石が並ぶ「海前院光蓮寺」



安藤広重「蒲原夜之雪」

## 5 富士川の洪水で移動した蒲原宿

11.26"蒲原一里塚跡に着いた、石碑が一本建っているのみでそこから眼と鼻の先に蒲原宿東木戸跡がある。こちら東海道の碑と説明板があるのみだが、やむを得ないことだ。そこから2分も歩くと以外にも発電所の太い導水管が4本も現われた。それを過ぎると宿場の中心に入っていく、いろいろな建物や宿場跡の碑が現われてくる。蒲原宿は富士川の舟運で米や塩の輸送基地として栄え、富士川の川止めの時には大変な賑わいだったという。本陣2、脇本陣3、旅籠4 2軒の宿場は元禄12年(1699)の富士川の洪水で北に移動している。そのため真っ直ぐだった道も山沿いに付け替えられたため、直角に折れる道になった。

宿場に入っははじめに見たのは、「問屋・名主 利左衛門」の名が入った今でいう表札と、3階建ての土蔵だ。これは蒲原宿の問屋職を代々務めた渡辺家である。材木を扱っていたことから「木屋」という屋号で呼ばれていました。この土蔵は四隅の柱が上にいくにつれ、すこしずつ狭まる「四角具」という技法で建築されています。3階建ての土蔵は例がなく、天保9年

(1838)建築の棟札が残っています。ここから5分も歩くとなまこ壁と「塗り家造り」の家が現われます、元「佐野屋」という商家でした。壁は黒の塗り壁で、なまこ壁の白と黒のコントラストが装飾的で、街道筋には珍しい寄棟の屋根とがあいまって重厚感にあふれています。今度は木造2階建てのお休み所の旗が立つ、大きな家の前に来ました。見ると店先に説明板があり、ここが本陣跡でした。ここは西本陣(平岡本陣)で、ここから100m程東に東本陣(多芸本陣)もありました。



3階建ての土蔵



塗り家作りの家

さらに5分も行くと大正時代の家と分かる洋館があります、国登録文化財「旧五十嵐歯科医院」で、外観は洋風なのに内観は和風という珍しいものです。その入り口にはコーヒー、紅茶などのメニューが立てかけられており喫茶コーナーがあるのです。でも病院でコーヒーを飲むというのはどうかかと.....あまり気がすすまないのではと思う。名古屋市では裁判所跡に喫茶コーナーがあったが、やはり雰囲気としてはあまりいいものではない。

そして道を直角に曲がると西木戸で、ここから街道は駿河湾沿いに一直線に伸びて由比宿に向かう。時間は丁度12.00"だが飲食店は一軒も見当たらなかった。この蒲原宿へはJR新蒲原駅で降りるのだが、小休止してから次の蒲原駅まで30分歩いて駅前に暖簾のかかる「蒲原館」を見つけた。でも数人の人が店の外で並んでいるではないか、迷ったが店はなさそうなのでわ

れわれも並んだ。外からは分からなかったがラーメン主体の店で、意外に回転は早くわれわれも520円のラーメンを食べて一息ついた。